

学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	齊藤 彩 【人間発達科学専攻 平成26年度生】	<p>本論文では、思春期における子どもの注意欠如・多動傾向が学校および家庭での適応を通じて二次的な不安や抑うつ等の情緒的な問題と関連するメカニズムについて実証的な検討がおこなわれた。関連メカニズムに関する行動遺伝学的な 2 つの研究から注意欠如・多動傾向から情緒の問題への因果関係が確認され、その背景には遺伝要因とともに個々人に特有の効果をもたらす非共有環境要因が寄与していることが明らかにされた。さらに、単胎児を対象とした 3 つの研究から注意欠如・多動傾向の高い子どもは、学校でのイベントの体験を経由して自尊感情が低下し、その後抑うつや不安等の情緒の問題傾向が高まるという連続的な因果の流れに関するパスモデルが提唱され、後の情緒の問題を予防、軽減するための学校におけるポジティブな経験の増加やネガティブな経験の減少を子ども自身が実感できるようなケア・サポートの充実が課題であることが論じられた。</p> <p>本論文に対する審査は 3 回おこなわれ、第 1 回目の審査（平成 29 年 6 月 28 日）では、行動遺伝学的な検討や比較的大規模な学校での横断調査、家庭を対象とした縦断調査を勢力的に展開し、エビデンスに基づいた因果モデルを提唱できたことは高く評価されるものの、概念の曖昧さや呈示されたモデルの統計学的指標の記載方法に再検討や修正が必要であることが指摘された。第 2 回目の審査（平成 29 年 7 月 20 日）では申請者によるプレゼンテーション審査がおこなわれたが、詳細な修正の指摘がなされた。公開審査（平成 29 年 9 月 3 日、参加：24 名）では適切なプレゼンテーションがおこなわれ、また質疑応答においても妥当な回答がなされた。主査菅原ますみ、大森美香、上原泉、石口彰、富士原紀絵の 5 名の審査委員により最終審査（平成 29 年 9 月 3 日）を行った結果、論文について指摘された修正が適切になされ、また公开发表ならびにその後の最終試験においても満足すべき応答が得られたことから、申請者の研究に対する理解力と学力が十分であるものと判定された。</p> <p>以上の結果から、本審査委員会は、本論文が人間文化創成科学研究科の学位、博士（人文科学）、Ph.D. in Psychology に値するものと全会一致で判断し、合格とした。</p>
論文題目	思春期の注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連メカニズム	
審査委員	(主査) 教授 菅原 ますみ	
	教授 大森 美香	
	准教授 上原 泉	
	教授 石口 彰	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（可・<input checked="" type="radio"/>否）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p style="margin-left: 20px;">ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p style="margin-left: 20px;">イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p style="margin-left: 20px;">ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">⊕. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※ 本学学位規則第 2 4 条第 4 項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	